

フェミニストにおける理性と感情：

Brontë の *Shirley* 試論

橋 本 登 代 子

Conventionality is not morality. Self-righteousness is not religion. To attack the first is not to assail the last. To pluck the mask from the face of the Pharisee, is not to lift an impious hand to the Crown of Thorns.

Charlotte Brontë (1816–1855) は *Jane Eyre* の第2版 Preface¹で上のように述べ、Thackeray に作品を献じている。“Conventionality is not morality”であるという Brontë の信念は、日常生活に見られる不合理に納得できぬ彼女自身の判断が培ったものであると思われる。Brontë は *Jane Eyre* を Currer Bell という名で出版しているのであるが、*Shirley* においても同様である。上記の引用に含まれる Brontë の考察は、*Shirley* にも受け継がれている。

Brontë は *Shirley* で、英仏の緊張した関係やラダイト襲撃事件²等の歴史的題材を扱っているが、彼女の経験に基づくと思われるヨークシアの人々や風俗を描く際には、未来に向かっての動き以上に、過去からの習慣に冷静な目を向けている。

作品の冒頭には、飢餓の時代と言われる日々に、教区の信徒達の家でのもてなしを当然のごとく享受する特権的な立場の curates と、彼等に給仕しながら、その横柄な態度に対して内心立腹している主婦の姿が描かれている (11).³

Shirley の時代設定は1811年から1812年であり、出版は1849年である。G. M. Trevelian は、『イギリス社会史』の中で40年代の英国社会を、「過去においては、貧困とは個人的な不幸であったのに、今やそれは集団的な不平不

満となったのである。』⁴ と説明しているが、歴史の遠近関係からして作品の内容が切実に理解できる頃に出版されていることを、後の読者は知るのである。

読者は、又、さまざまなテーマが統合されているかに見えるこの作品に、⁵ 一貫した問題提起があるのに気づく。それは、女性達が置かれている状況に抗議する Brontë の意識である。本稿では、woman figures の発言や行動に注目して、その背後に存在する Brontë のフェミニズムを考察したい。

I

ブノワット・グルーの『フェミニズムの歴史』は *féminisme* という言葉の由来を次のように伝える：

フェミニズムという言葉自体は1830年頃、無尽蔵に新語を発明する ユートピスト 空想家、シャルル・フーリエの筆のもとに生まれた。しかし、日常語になったのは1892年、パリ第5区の区役所で、女優であり、女性政治家だったマルグリット・デュランが議長を務めた女権会議が開催された時だ。⁶

又、K. A. Wieth-Knudsen はその著作、*Feminism* の中で次のように述べている。

We find then that present-day Feminism as an idea—even though it was to prove itself a bad idea—has its root in the general ideas of equality which appear in the course of the eighteenth century among the philosophers of the Age of Enlightenment, and which were crystallized, for example, in the celebrated Declaration of the Rights of Man at the time of the French Revolution.⁷

上記の引用から、フェミニズムという言葉がフランス革命以後、女性も権利の平等の原則を確保すべきであるという考えを持つ人々によって使われ、

「自由」「平等」「博愛」の精神が女性にも適用されるべきだという主張がなされてきたことが分る。上記の『フェミニズムの歴史』は、女性への偏見の打破を主張した男性達の一人として、John Stuart Mill の名をあげている。ミルはその自伝でハリエット・テイラー (Harriet Taylor) との親交について述べている。彼は、その中で女性の社会的地位について考察しているのであるが、社会が「女性的なものとして」女性に認める分野の閉鎖性を指摘している。⁸ ミルは、女性の情熱が「女性用の水門に流れこんでゆく」⁹ という表現を使っている。この閉鎖性については、*Shirley* では、Brontë が情熱の捌け口を義務感の中に見出すヨーク家の母親像を通じて、ミルが指摘する事実を人物化しているのである。

さて、それでは、*Shirley* におけるフェミニズムはどのような特徴を持っているのであろうか。*Shirley* の women figures がはたして「自由」「平等」「偏見の打破」を主張しているのかという視点を手掛りにして、この作品の中で Brontë が如何にフェミニズムを提示しているのかを考察してゆくことにする。

伯父 Helstone 司祭に育てられている Caroline は、Hollow's Mill の工場管理者で、従兄にあたる Robert Moore を慕っている。Fieldhead に住むようになった Shirley はキャロラインと親交を結ぶ。シャーリーの肩書は、Shirley Keeldar, Esq., Lord of the Manor of Briarfield なのであるが、健康と富と美貌を有する彼女に匹敵する男性は無いかにも見えるのである。ナポレオン戦争によって販路をふさがれ苦難の状況にあるロバートは、新しい機械を採用して経営の合理化を図り、労働者の人員整理をする。職工達は機械の導入を阻止しようとするが、ロバートは対抗して首謀者を捜し出そうとする。彼等は、彼の工場を襲撃するが、事前にその動きを把握した彼は、迎えうち、彼等を撃退する。

ロバートは、財産の無いキャロラインからの好意を感じても、経営者としての自分を優先させて、シャーリーに求婚さえする。キャロラインは、伯父

ヘルストンの厳命もあり、自分も決意してロバートに会わないようにするが、失意のあまり健康を失ってゆく。ヘルストンはキャロラインの感情を理解しない。シャーリーや彼女の元家庭教師、Pryor 夫人との交わりの日々は、キャロラインにとって、女性の社会的立場を考える日々でもある。

シャーリーの叔父 Sympson とその一家が Fieldhead に滞在するようになり、シャーリーの従弟 Henry、ヘンリーの家庭教師でロバートの弟 Louis Moore も Fieldhead に住むようになる。一方ロバートはシャーリーに結婚を申し込むが、きっぱりと断られ、ロンドンに行ってしまう。シャーリーは、ロバートの求婚の動機が工場運営の為の経済的理由からのものであり、彼が彼女への愛を偽っている自分自身に気づいている事実を指摘する：“Gérard Moore, you know you don't love Shirley Keeldar” (607)。シャーリーは、キャロラインのロバートへの愛と、ロバートのキャロラインへの愛情に気づいているようである。ここでは、シャーリーの理性がロバートの動機を見破って、もっと自分に誠実であるようにと、彼を正そうとしているのである。

“*Shirley is the most revealing in showing her general attitude to women's rights*” と Linton Andrews が Brontë について述べているように、¹⁰ 彼女は women figures 全員に、フェミニズムの視点からの問題提起をさせている。作品の冒頭はヨークシアの生活描写から始まる。

II

まず幼い娘の発言に注目してみよう。この作品で両親のそろった家族の全体像が描かれるのは、唯一、Yorke 家のみであるので、異なる世代の発言を対比しうる状況を設定したヨーク家の存在は重要である。ロバートが暖炉のある居間の仲間に入る場面は、幼い娘達が年上の男性に優しくしてもらう時の人生の至福が伝わってくるのであるが、訪問者を迎えてはしゃぐ心は、母親の忠告で沈んでしまう (173)。

年上の人達の前では、特に女の子達は黙っている方がふさわしいと母親は

言う。姉娘 Rose は何故特に女の子がそうでなければいけないかと静かに問うのであるが、妹娘の Jessy は、兄弟達への大人の接し方と比べての日頃の不満を述べる：

... all my uncles and aunts seem to think their nephews better than their nieces; and when gentlemen come here to dine, it is always Matthew, and Mark, and Martin, that are talked to, and never Rose and me. (173)

注目を受けることは、期待を受けることにつながり、情熱がそれに反応するのである。ジェシーの言葉は、学齢期になる前に、男兄弟達とは違って、無視される幼い娘からの注目の平等を要求する発言と解釈しうる。

彼女達の母親は、娘達に“must not”という言葉でしつけをする。娘に自分の価値観を押しつける母親なのである。彼女の情熱は、女中達の悪口を言う時に勢いを得る。経済的にも恵まれ、夫も子供も持つ既婚の女性が、より若い世代の同性に、良き結婚への夢を持たせる存在からはほど遠いのである。Brontë は、ヨーク家の母親を通じて、女性が女性の壁になる姿を描いている。

しかし、この Mrs. Yorke も男性中心社会の犠牲者であるという事実も見逃し得ない。ミルが考察しているように、女性にとって、情熱や努力を注ぎ込める領域¹¹ は少ないのである。社会から「女性的なもの」¹² として認められる活動は、家事の切り盛りと子育てである。彼女の義務観に基づく子育ては、彼女にとっての唯一の捌け口である。

同じことがロバートの姉 Hortense にも言える。“her household ways” (73) を守ることが彼女の情熱の捌け口である。銃で打たれて、ヨーク家に世話になっていた弟が久しぶりに、帰宅した夕べ、彼女は、ひき出しの整理を思いつき、くつろぎの場から離れる。ヨーク夫人とオルタンスの仲が良いのは、二人に共通の自負があるからであろう。“Conventionality is not morality.” と信じる Brontë の声は、女性の精神活動の機会を拡大し、精神を解放した

いと願うものであり、女性にとっての“must not”が本当に“must not”であるかどうかを問い正そうと、女性の自覚を促す声でもある。

一方キャロラインは、伯父がロバートとの交際を禁止した時、自ら決意して命令に従う。それは、ロバートが仕事に没頭して、彼女に注意を払わないからでもあった。彼女自身の孤独で淋しい時間に、村の未婚女性達についても、思いを馳せる。死後の世界での至福を思い描くことで日々を耐えているような、Miss Ainleyの生活を見て、キャロラインは、神は女性を、死後の世界にのみ望みを託して生きようにはお創りになっておられない筈だと思う(441)。Lawrence Stoneは、*The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800*¹³の中で、上流階級の未婚女性の数が急上昇した事実を述べているが、父や兄に遠慮しながらひっそりと生きる未婚女性への気遣いは、実際の歴史を読者に語るものでもある。

P.P. Sharmaが“Charlotte Brontë: Champion of Women's Economic Independence”の中で、“Caroline Helstone is a modern woman conscious of her duty to be economically independent.”¹⁴と述べているように、キャロラインが村の女性を観察し、自分の境遇にも照らして望むことは、自活の為に働きたいということであった。愛するロバートが自分の愛に報いてくれそうもないと悟った彼女は、自分は一生未婚のままで過ごすだろうと思うのである。ロバートの心が、彼女のあずかり知らぬ事柄への興味や責任感で一杯であるように思うにつけ、今後の空虚な時間を、無為に過ごしたくないと思うのである。彼女の思いは、女性の性を代表するかのごとく普遍的なものである(441-44)。

弱い性として男性に保護されるのではなく、働く場の中で、考え、啓発される場が欲しいと彼女は願う。ジェシーの発言と同じく、日常体験から出た思いであるが、“What is a woman?”を問う哲学的考察でもある。与えられるということは、与える側の意志の尊重を伴う。品性を落としてまで、男性の愛を求めるべきではない。生活の為、生きのびる為の結婚ではなく、希望

する結婚ができるようになるまで、自由な感情を大切にしたい。その為には、仕事をして自活したい。人間性の本質と女性性の本質は、異なるものではなく、隷属より希望の中でこそ、気力も充実し、健康もあるという考察である。

キャロラインは心中、女性が置かれているような状況に、もし男性が置かれるとすれば、そのような人生を良しとするか、と問うのである。彼女は“Men of England!” (443) と語りかけ、同胞の女性に目を向けて欲しいと願う。村の女性達をこのように表現しているのである：“dropping off in consumption or decline,” “degenerating to sour old maids,” “reduced to strive . . . to gain that position . . .” (443) いずれも、もとある状態より下降するという表現であるが、背後に、真の女性性をもっと良い状態にあるのだというキャロラインの意識、それに重なる作者の意識がある。

当時の女性達にとって、唯一の職業と呼べるものは、governess、つまり住み込みの家庭教師であった。キャロラインが家庭教師になって、ヘルストンの保護から自立したいと思った時、プライア夫人は、その境遇がどれほど悲惨なものであるかを語る：

All I mean to say, my dear, is, that you had better not attempt to be a governess . . . were you to fall under auspices such as theirs, you would contend a while courageously with your doom; then you would pine and grow too weak for your work: you would come home—if you still had a home—broken down (425-26).

プライア夫人の“Such is the history of many a life” (426) という言葉は、家庭教師という職業を得た女性も、多くは不幸な境遇であると語っているのである。この言葉は、女性にとっての唯一の仕事が悲惨なものである故に未婚の女性が結婚による経済的安定を求めようとする状況を説明する。Sykes家の母や娘達にとって curates の存在は重要であったのである (125)。

Brontë の意識の中では男性から軽視されるということへの恐れは強烈で

ある。彼女は、キャロラインの観察を通して、女性が何故物笑いの対象になるのかを説明する：“They scheme, they plot, they dress to ensnare husbands. The gentlemen turn them into ridicule . . .” (442)。この場合の Brontë の意識は、女性の性の尊厳を維持したいという願望が裏付けとなっている。

III

これまで、日常生活の観察から生まれた作者のフェミニズム精神を、幼い少女の発言と自活を願う娘の希望の思いの中に探ってきた。作者は、長子継承の伝統にも読者の注目をひく。シャーリーは、自分が狂犬に噛まれて死ぬ運命にあると思った時、ヘンリーに遺言状についての彼女の決心をそっとうちあけるのである (568)。それは、財産継承権における男女間の不平等を自分の意志で是正しようとするものである。ヘンリーに比べれば、ヘンリーの姉達をこれっぽっちも好きではないのだが、遺言のない場合、財産は全部ヘンリーに行くので、彼女達にもお金を残しておくつもりであると言う。この法への言及は、¹⁵ Brontë の関心と抗議を表わすものと理解しうる。

過去の偏見への抗議の一例として、シャーリーの作文にも注目すべきである。ルイは、シャーリーの作文 “The First Blue-Stocking” を暗誦していて、彼女に聞かせる。その物語は、『創世記』からの引用と共に「時の始め」から始まる。両親を失った女の子が、美しい少女となって、谷や森の中で自然の恵みを受けて生長する。“Of all things, herself seemed to herself the centre . . .” (550)。自分を全ての中心と思い、天からの「エヴァ」という声を聞いた娘は、“A Son of God! Am I indeed chosen?” . . . “My glorious Bridegroom! . . .” (552) と叫ぶ。彼女は “Unhumbled, I can take what is mine.” (552) と精霊が叫んだように感じる。

女性を人間以上の存在と関係させることにより、「より劣った性」というイメージを払しょくしたいと望む作者の意図がうかがわれるが、この作文の

内容は、成長したシャーリーが祝祭日の夕方、キャロラインと夕日を眺めながら交す会話に受け継がれる。

自然が夕べの祈りを捧げていると想像して、シャーリーは、人類の祖先としての母性を精霊の子の母としてのイメージで語り、ミルトンのイヴ像に抗議するのである(359)。女性は男性を堕落させた性ではなく、むしろ疲れた人々を癒す自然と一体となった性であるという主張である。キャロラインと同様、自然の景色を視る行為から、彼女の哲学的考察をひき出している。作者は、ヒロイン達の想像力を解放する。その心的空間を描く詩的な手法は、時間と空間の制限を超越して読者の想像力の参加をも要請する。

彼女達の言葉や思いは、過去からの偏見を拒み、自由と平等を願うフェミニズムの idea に沿うものである。慣習に左右されぬ個としての心が touchstone になっており、率直な思いが、自分自身の利害や感情を超越した女性全体の為の考察へと発展している。

IV

それでは、彼女達は個としての性を、どう受けとめているのであろうか。女性が自分の性を最も意識するのは、恋愛を経験する時である。まずキャロラインについて考察してみよう。

シャーリーとロバートとの関係を疑って、恋心に苦しむキャロラインは、一見、シャーリーと対照的な性格を有している。彼女は内省的な女性である。そして激しい克己心を持っている。彼女は、ロバートの冷淡な態度を見た時に、歯をくいしばって、恋心を押えようとする。彼女のストイシズムは、女性である故に自己に課すストイシズムなのである：

A lover masculine so disappointed can speak and urge explanation;
a lover feminine can say nothing: if she did the result would be shame
and anguish, inward remorse for self-treachery. (117)

感情の奔流をせきとめようとする彼女の厳しい努力は、スコットランドのバラッドの引用によって、抒情的に表現されていて、風や雪の淋しい冬景色は孤高の闘いを象徴する。

ナレーターは、恋人に捨てられた不幸な女性の体験を語るが、それはまるで、キャロラインの独白であるかのようである。彼女は、恋愛の甘美な無力感に浸るのではなく、自らの克己心を奮い起すべく、冷静な他者の声で自らを諭す：“You held out your hand for an egg, and fate put into it a scorpion. Show no consternation: close your fingers firmly upon the gift; let it sting through your palm” (117-18).

Brontë の他の作品、*Villette* においても、恋愛における理性による抑制が称賛されている。

I believe Madame sermonized herself. She did not behave weakly, or make herself in any shape ridiculous . . . she behaved well. Brava! once more, Madame Beck. I saw you matched against an Apollyon of a predilection; you fought a good fight, and you overcame!¹⁶

“I” は Lucy Snowe で Madame Beck の理性に拍手を送っている。愛は “an Apollyon of a predilection” との闘いであると見て、Madame Beck の克己心はその闘いに勝ったとルーシーが観察している場面であるが、一人称のナレーションの背後に作者の意識がある。

キャロラインの場合も、ナレーターの意識は作者の意識であり、“... if she has sense, she will be her own governor” (120) と語り、その闘いに激励を送っている。読者は、ここで、このような態度はすでに見たフェミニズムの特徴と異なるものであると気づき始める。

さて、それでは Brontë が創造した美貌のヒロイン、シャーリーは、彼女の性をどう受けとめているのであろうか。ここで、小説におけるヒロインの美しさについて語る Rachel M. Brownstein の意見を読んでみたい：

Perfect beauty distinguishes the heroine of romance; in novels that question romance's conventions, perfect beauty may very well signal perfect insipidity. A novel heroine's beauty is therefore often marked by some "natural" irregularity, a sweet disorder that hints perhaps at sexual vitality.¹⁷

ロマンスにおけるヒロインと異なり、小説におけるヒロインの美しさは、性のバイタリティさえ感じさせるであろう、規格化されぬありのままの姿であると述べられている。性の描写について言えば、*Shirley*にもそれを感じ受しうる数例がある。次の場面に注目してみよう：

The Evening flushed full of hope: the Air panted; the Moon——rising before——ascended large, but her light showed no shape.

"Lean towards me, Eva. Enter my arms; repose thus."

"Thus I lean, O Invisible, but felt! And what art thou?" (551)

これは、生む性としての女性が抱擁の中で憩う性の描写であると言える。しかし、この絵はシャーリーの想像が描いたものなのである。少女の作文にしては、大胆な描写である。

ところが、現実の恋愛状況の中では、感情の "spontaneous overflow" を良しとしない要素は、シャーリーにもある。ルイが彼女への愛を確認する場面は、読者が彼のノートを読むのであるが、その内容で、読者は、彼と彼女が愛情を告白し合う場面を見る。ルイは、シャーリーの彼への気持をひき出す為に、彼女の嫉妬心を利用しなければならなかった。彼がみなし子の娘を見つけて結婚すると言った後でやっと彼は、"Dear Louis, be faithful to me: never leave me. I don't care for life, unless I may pass it at your side."

(712) という素直な言葉を得るのである。

シャーリーは、叔父シンプソンとの会話で、彼女が理想とする夫について

語っている。シャーリーの叔父シンプソンは、Sir Philip Nunnely とシャーリーとの結婚を望んでいたが、シャーリーが彼からの求婚を断ったと聞き、立腹する。シャーリーとシンプソンとの関係は、キャロラインとヘルストンとの関係と対照的である。ヘルストンの命令に服従するキャロラインと異なり、シャーリーは対等にシンプソンと意見を戦わす。

シャーリーは、“I could not obey a youth like Sir Philip. Besides, he would never command me: he would expect me always to rule — to guide, and I have no taste whatever for the office.” (626) と言う。彼女は夫に、“to command,” “to rule,” “to guide” が出来る能力を要求しており、彼女がその立場に立つことを望んでいない。彼女が夫を選ぶと言っても、彼女の方から意志表示をするのではなく、意中の人以外の候補者を、たとえ財産、階級、血統が彼女より良くても、断固として断わるという意味である。

彼女が、“I will accept no hand which cannot hold me in check” (626) と言う時、彼女は彼女の“impatient temper”を抑制し得る夫を望んでいると理解出来るが、読者はここで、入念に彼女の説明を聞く必要がある。夫の“mastery”を望む気持を、彼女は次のように言う：

One in whose presence I shall feel obliged and disposed to be good.
 One whose control my impatient temper must acknowledge. A man
 whose approbation can reward — whose displeasure punish me. A
 man I shall feel it impossible not to love, and very possible to fear.
 (627)

上記の“reward,” “punish,”そして“fear”等の言葉から、シャーリーが夫との関係を神との関係に近似したものと考えていると理解されよう。妻が自我を押えて、夫婦が二人で創り出す夫婦の人格に深度が加わるのは、事実であろう。しかし、それは、常に夫の理性を妻のそれより上位に置く考え方ではなからうか。人としての夫の“impatient temper”を妻の理性が抑制す

る場合があっても良いのではないか。現に、ロバートがシャーリーに求婚した時、彼女は彼の職業優先的な動機を看破し、彼が彼自身に対して誠実ではないと論したのである。この場合、女性の思考が男性のそれより、より正しく働いたと言える。

シャーリーは、ルイと愛情を告白し合った後も、彼との間に冷静な隔たりを置く。彼女は、なかなか結婚の日取りを決めようとしな。シャーリーやキャロラインが同胞の女性達の為に思いを激しくしたその精神の高揚は、ルイに受け継がれている。彼は、彼のノートの中で鎖を噛み砕こうとする雌ひよりの姿を、シャーリーに重ねる。彼は彼女の中に“*virgin freedom*” (719) に焦られる思いがあることを見てとっているのである。シャーリーの心は、支配されることを望む気持と、自己の独立を願う気持ちとの間で揺れ動いている。

シャーリーは最終的には、支配されるほうを選ぶという印象を読者に与えるが、彼女の意識の中には、彼女が精神的に夫を支えるという可能性は表れてこない。彼女の個としての愛の意識は、夫と妻の相互の支え合いという意味での「平等」を要求する意識が無く、夫の人格に愛を感じ、自己を委ねるという、むしろ伝統的な立場のものであると言えよう。

V

愛する肉身を次から次へと失っていった孤独の日々に書かれた *Shirley* ではあるが、作家のタイトルが、Author of “*Jane Eyre*” と記されているように、読者の期待に答えんと、Brontë は意欲的に、オースティンが取り上げなかったような題材を作品に扱っている。

ナポレオン、ウェリントン、ウェズレー等の男性が動かす社会を描きつつも、Brontë はヨークシャーの女性達の生活をも観察者としての目で描いているのである。ヒロイン達が女性の性全体の為に思い発言する時は、感情を抑制せず、伝統的な偏見の打破を要求し、不平等な習慣に抗議し、自活の為の

機会を望むものであった。その思いや発言は政治的行動とまではいかぬが、連帯意識に裏づけられたものであった。

しかし、個人としての性を、恋愛状況の中で探ってみると、ヒロイン達は、まるで伝染病を警戒するかのようになり、かたくなな態度で自然な感情を規制する。そこには、女性である故、愛を乞い求めるべきではないとする自尊心がうかがえ、彼女達が想像空間で示す自己の思いへの率直さが無い。それは、愛を前提とする筈の結婚が、多くの場合は、経済問題であったという女性の歴史を示すものである。

富と美貌を有し squire を装うシャーリーは、夫の“mastery”を望むのであるが、それは、夫の理性を妻の感情より上位に置く縦の関係であって、妻の理性が夫の感情より正しく働く場合もあり得るという認識に欠けている。自由、平等、伝統的な偏見の打破を願うフェミニズムの理想は、結婚生活という個人のレベルにあっても、理性の働きに関しては、相互の受与を願うものである筈である。

結論として言いたいことは、Brontë が激しくフェミニストであるのは、他の女性達との連帯意識を持つ場合のみであるということである。

注

1 Charlotte Brontë, “Preface” to *Jane Eyre*, ed. Margaret Smith (London: Oxford University Press, 1973), p. 3.

2 トレヴェリアンは、「ナポレオン戦争の最中に、ノッティンガムシャー、ヨークシャー、ランカシャーの製造業者のあいだでは、失業、低賃金、飢餓が周期的に生じたが、それには幾分かは新たな機械類の出現が原因となっていた。1811～12年に、『ラダイツ』は組織的な行動計画にもとずいて、紡織機のフレームの破壊を開始した。」と述べている。『イギリス社会史』松浦高嶺・今井宏訳（東京：みすず書房，1983），p. 396.

3 Charlotte Brontë, *Shirley*, The Clarendon Edition of the Novels of the Brontës, ed. Herbert Rosengarten and Margaret Smith (Oxford: Clarendon Press, 1979)

この作品からの引用は、この版によるものとし、本文中に引用頁数を括弧内に示す。

4 『イギリス社会史』 p. 383.

- 5 Lewes は *Edinburgh Review* に寄せた *Shirley* の書評の中で “a portfolio of random sketches for one or more pictures” と評した。 (Judith O’Neill ed., *Critics on Charlotte & Emily Brontë* [London: George Allen and Unwin, 1968] p. 16.) また Korg は、シャーリーやキャロラインの “the romantic view” が日常生活の行為の基準を提供するものであるとし、*Shirley* は哲学的な作品であり、その哲学が各部分を統合すると述べている。 (Jacob Korg, “The Problem of Unity in *Shirley*,” *Nineteenth Century Fiction*, XII [1957–8], 125–36.)
- 6 Benoîte Groult, *Le Féminisme au masculin*, 『フェミニズムの歴史』山口晶子訳 (東京: 白水社, 1982), p. 16.
- 7 K. A. Wieth-Knudsen, *Feminism*, trans. Arthur G. Chater (London: Constable, 1928), p. 235.
- 8 J.S. ミルは、女性が「個人的情熱以外の情熱を持つてはならない」とされてきており、他の行動分野を要求することは、女性らしい感情を持っていないという推論が導びかれると指摘している。『J.S. ミル初期著作集』杉原四郎・山下重一編, 2巻 (東京: お茶の水書房, 1980), p. 14.
- 9 *Ibid.*, p. 14.
- 10 Linton Andrews, “Charlotte Brontë: the Woman and the Feminist,” *Brontë Society Transactions*, 12 (1951–55): 355.
- 11 Mill, p. 14.
- 12 *Ibid.*, p. 14.
- 13 Lawrence Stone, *The Family, Sex and Marriage in England 1500–1800* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1977), p. 380.
- 14 P. P. Sharma, “Charlotte Brontë: Champion of Woman’s Economic Independence,” *Brontë Society Transactions*, 14 (1961–65): 39.
- 15 “No study of the English landed family makes any sense unless the principle and practice of primogeniture is constantly borne in mind.” (Stone, p. 87)
- 16 Charlotte Brontë, *Villette*, Vol. 3 of *Life and Works of The Sisters Brontë* (New York: AMS Press, 1973), p. 121.
- 17 Rachel M. Brownstein, *Becoming a Heroine* (New York: Viking Press, 1982), p. 163.